

## 未成年大学生における飲酒と心理社会的要因の関連

安藤美華代

**Aim:** The purpose of this study is to identify psychosocial factors associated with drinking behavior among underage university students. **Methods:** University students under the age of twenty (N=236) completed a self-reported questionnaire. Relationships between psychosocial variables and drinking were investigated using multigroup structural equation modeling analyses. **Results:** Number of friends who drink alcohol, vigor, self-efficacy in interpersonal relationships, self-assertive efficacy against drinking, self-efficacy in overcoming difficulty, and impulsiveness were associated with drinking behavior. **Conclusion:** These findings suggest that self-assertive efficacy to resist peer pressure, self-control and mood status are potentially important factors that could be addressed by programs to prevent drinking among underage university students.

Keywords : 未成年大学生, 飲酒, 友達の影響, 気分状態, 自己効力感

### はじめに

未成年者の飲酒は、精神的・身体的な発達に重大な影響を与えるだけでなく、交通事故など社会的にも影響を及ぼすとして、未成年飲酒禁止法で禁止されている。しかし、未成年者が多く在籍するにもかかわらず大学生活においては、部活動やサークル活動の歓迎会等が飲酒の機会を増やす場となっている。飲酒による大学生の事故の被害や加害、死亡は後を絶たず、憂慮すべき問題である。

自立することへの価値観・期待感や自己コントロールといった個人システム、保護者や友達の影響といった環境システム、行動システムの3つのシステムによって、問題行動を理解する問題行動理論<sup>1)</sup>では、飲酒、喫煙、薬物使用、逸脱行動等を包括的に捉え、それらの問題行動に影響を与えている心理社会的要因はある程度共通していると考えられる。つまり、飲酒行動は、他の問題行動をも生じる可能性を孕んでいる。従って、飲酒に関連する心理社会的要因を検討することは、飲酒だけでなく他の問題行動を含んだ包括的な予防対策を示唆する可能性がある。

そこで本研究では、未成年大学生に焦点をあて、飲酒の実態を把握し、飲酒に関連する心理社会的要

因を明らかにすることを試みた。特に、飲酒との関連が強いとされている友達の影響<sup>2) 3)</sup>とそれにまつわる自己効力感、暴飲の潜在的リスク要因と考えられている刺激追求に関連するとされる衝動性・気分状態<sup>3) 4)</sup>といった要因に着目した。

### 方法

#### 1. 調査方法と対象者

中国地方の大学に在籍する未成年者236名(男子84名, 女子152名)を対象とした。平均年齢は、 $18.5 \pm 0.5$ 歳である。

調査は、2008年4月に行われた。無記名の自記式調査票を配布し、記入後回収する方法で実施した。

調査への理解と協力を得るために、調査の目的および実施方法、プライバシーの保護、調査への協力は自由意志に基づくものであること、協力しなくても不利益のないことを調査票に明記するとともに口頭で説明し、同意を得た。

#### 2. 調査内容

##### 1) 飲酒に関する調査内容

「過去1ヶ月間でどの程度飲酒したのか」と尋ね

た。回答方法は、「全くない」= 0, 「月に1回くらい」= 1, 「ときどき」= 2, 「週に1回くらい」= 3, 「週に2から3回以上」= 4の5段階評定とした。

## 2) 心理社会的要因に関する調査内容

飲酒する友達の影響。Deviant Peer Influence Scale<sup>5)</sup>を応用し、「あなたの最も親しい友達4人のうち、何人が飲酒しているか」と尋ねた。回答方法は、「0人」= 0, 「1人」= 1, 「2人」= 2, 「3人」= 3, 「4人」= 4の5段階評定とした。

悪い誘いを断る自己効力感。友達から問題行動に誘われた時に断ることができる能力を測定するSelf-regulatory Efficacy Items<sup>6) 7)</sup>を参考に、「友達から飲酒を誘われた時、どの程度誘いを断ることができますか」と尋ねた。回答方法は、「うまく断れない」= 1, 「ややうまく断れない」= 2, 「どちらともいえない」= 3, 「ややうまく断れる」= 4, 「うまく断れる」= 5の5段階評定とした。

社会性に関する自己効力感。社会性に関する能力を持っている自信や様々な対人関係の問題・葛藤を解決できる自信などを測定するために、Social Self-efficacy<sup>6) 8)</sup>に関する評価やこれまでに行った調査<sup>9)</sup>を参考に、独自に項目を作成し、構成概念の妥当性および信頼性を確認し得た「社会性に関する自己効力感」尺度を用いた<sup>9) 10)</sup>。内容は、「友達同士のもめごとの仲立ちをする」といった「対人関係自己効力感」、「困難なことがあっても前向きに行動する」といった「困難に打ち勝つ自己効力感」、「不快な気分させられた時怒りを我慢する」といった「自己コントロール自己効力感」、「いくつかの方法を試みて最もよいと思うものを選んで問題を解決する」といった「問題解決自己効力感」の4因子からなる。回答方法は、「自信がない」= 1, 「やや自信がない」= 2, 「どちらともいえない」= 3, 「やや自信がある」= 4, 「自信がある」= 5の5段階評定で行われ、各因子を構成している項目の得点を単純加算したものを尺度得点として用いる。

自己コントロール。日常生活における怒りや衝動性のコントロールの程度を測定するWeinberger Adjustment Inventory<sup>11)</sup>を参考に作成し、構成概念の妥当性および信頼性を確認し得た「衝動性」尺度を用いた。「楽しいことをしている時興奮してはめをはずす」など6項目からなる。回答は、この1ヶ月間で「全くない」= 0, 「月に1回くらい」= 1, 「ときどき」= 2, 「週に1回くらい」= 3, 「週に2~3回以上」= 4の5段階で評定され、項目の得点を単純加算したものを尺度得点として用いる。

気分状態。気分を評価するために、「緊張—不安」

「抑うつ—落込み」, 「怒り—敵意」, 「活気」, 「疲労」, 「混乱」の6つの気分尺度を評価するPOMS (Profile of Mood States) 短縮版<sup>12)</sup>を用いた。ここ1週間の状態を尋ね、「全くなかった」= 0~「非常に多くあった」= 4の5段階評定で回答を求めた。各因子を構成している項目の得点を単純加算したものを尺度得点として用いる。

各尺度の項目数、得点範囲、 $a$ 係数、平均得点および標準偏差は、Table 1に示した。なお、「飲酒する友達の数」「飲酒の誘いを断る自己効力感」「対人関係自己効力感」「衝動性」の平均得点で性差が見られたことから、性差を考慮した分析を行うことにした。

## 3. 分析方法

まず、「飲酒」経験の頻度と性差について、 $\chi^2$ 検定を用いて検討した。

次に、「飲酒」と心理社会的要因の関連について、「飲酒」を従属変数、気分状態を媒介変数、その他の心理社会的要因を独立変数とした仮説パスモデルを立てた。そして仮説パスモデルについて、多母集団同時分析を行い、最もデータに適合しやすいモデルの検討を行った。

データとモデルの適合度を評価する指標として、GFI (Goodness of Fit Index), AGFI (Adjusted GFI), CFI (Comparative Fit Index), TLI (Tucker - Lewis Index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation), AIC (赤池情報量基準)を用いた<sup>13) - 18)</sup>。

統計的水準は10%とし、SPSS 15.0JおよびAmos16.0を使用して統計的分析を行った。

## 結果

### 1. 「飲酒」の実態 (Table 2)

過去1ヶ月間に1回以上「飲酒」を経験した者の割合は、男子71.4%, 女子42.8%と両群とも高率であり、男子の方が女子に比べて有意に高かった。

### 2. 「飲酒」と心理社会的要因の関連

#### 1) 相関分析 (Table 3)

「飲酒」と心理社会的要因の関連について、男女別に相関分析を行った。

その結果、男子においては、「飲酒」と「年齢」, 「学年」, 「飲酒する友達の数」, 「困難に打ち勝つ自己効力感」, 「衝動性」, 「怒り—敵意」, 「活気」と正の相関が見られ、「飲酒の誘いを断る自己効力感」, 「自己コントロール自己効力感」と負の相関が見られた。

Table 1 各心理社会的要因の項目数, 得点範囲,  $\alpha$ 係数, 平均得点と性差

変数	項目数	得点範囲	$\alpha$ 係数	全体		男子		女子	
				M	SD	M	SD	M	SD
飲酒する友達の影響									
飲酒する友達の数	1	0-4	—	2.02	1.66	2.46	1.63	1.77	1.63 **
悪い誘いを断る自己効力感									
飲酒の誘いを断る自己効力感	1	1-5	—	3.34	1.34	2.94	1.37	3.57	1.28 **
社会性に関する自己効力感									
対人関係自己効力感	6	6-30	0.67	20.15	3.88	19.31	3.88	20.62	3.81 *
困難に打ち勝つ自己効力感	3	3-15	0.70	9.56	2.60	9.26	2.34	9.73	2.73
自己コントロール自己効力感	2	2-10	0.58	7.65	1.72	7.55	1.78	7.70	1.69
問題解決自己効力感	2	2-10	0.67	6.96	1.80	6.95	1.88	6.97	1.76
自己コントロールの低下									
衝動性	6	0-24	0.65	4.30	3.26	4.87	3.56	3.99	3.05 *
気分状態									
緊張-不安	5	0-20	0.86	11.23	4.91	10.48	5.24	11.64	4.69
抑うつ-落ち込み	5	0-20	0.81	6.36	4.77	5.87	4.68	6.63	4.81
怒り-敵意	5	0-20	0.81	3.78	3.48	3.67	3.78	3.83	3.31
活気	5	0-20	0.88	8.76	4.58	8.74	4.15	8.77	4.81
疲労	5	0-20	0.88	10.05	5.04	9.56	5.16	10.32	4.97
混乱	5	0-20	0.64	6.86	3.90	6.43	4.13	7.11	3.75

注) 各変数は得点が高いほど, その傾向が強いことを意味する。単項目の場合,  $\alpha$ 係数は計算できない。  
 独立したサンプルのt検定による各変数の性差, 有意差 \* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ (両側検定)。各変数における分析者数は, 欠損値のため対象者数(全体236名, 男子84名, 女子152名)と同じでない。

Table 2 性別による過去1ヵ月間の飲酒頻度

	0回		1回から2回		ときどき		週1回位		週2回から3回以上		統計的検定
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	
全体	111	47.0	53	22.5	37	15.7	25	10.6	10	4.2	$\chi^2 = 28.62$ *** ( $df=4$ )
男子	24	28.6	18	21.4	19	22.6	15	17.9	8	9.5	
女子	87	57.2	35	23.0	18	11.8	10	6.6	2	1.3	

注)  $\chi^2$ 検定による男女間の有意差 \*\*\* $p < 0.001$ 。全体, 性の飲酒経験の頻度における%は, それぞれ全体(N=236), 男子(n=84), 女子(n=152)の合計人数を分母とした。

女子においては, 「飲酒」と「年齢」, 「学年」, 「飲酒する友達の数」, 「抑うつ-落ち込み」, 「疲労」と正の相関が見られ, 「飲酒の誘いを断る自己効力感」, 「自己コントロール自己効力感」と負の相関が見られた。

## 2) パス解析

相関分析において, 男女いずれかあるいは両方のサンプルで有意な関連傾向が見られた変数に着目し, 「飲酒」を従属変数, 気分状態を反映する変数を媒介変数, その他の心理社会的要因を独立変数としてパス図を構成し, 全体を対象にして, パス解析を行った。その際, 独立変数から従属変数, 独立変数から媒介変数へのパス係数で有意な傾向が見られない場合は, そのパスを削除した。その結果, 「活気」を媒介変数, 「衝動性」, 「対人関係自己効力感」, 「困難に打ち勝つ自己効力感」, 「飲酒の誘いを断る自己効力感」, 「飲酒する友達の数」を独立変数,

「飲酒」を従属変数とした仮説パスモデルが構成された。

構成した仮説パスモデルを, 男女別に分析したところ, 女子では適度なモデルの適合度が示されたが [ $\chi^2$  (d.f. = 5, N = 146) = 8.496,  $p = 0.131$ . GFI = 0.984; AGFI = 0.910; CFI = 0.979; TLI = 0.913; RMSEA = 0.069 (0.000 - 0.147)], 男子では, 示されなかった [ $\chi^2$  (d.f. = 5, N = 81) = 13.47,  $p = 0.019$ . GFI = 0.957; AGFI = 0.756; CFI = 0.879; TLI = 0.491; RMSEA = 0.146 (0.054 - 0.242)]。

次に, この仮説パスモデルに対して多母集団同時分析を行い, 適合が向上するかどうかも含め, 男女のデータに最も適合しやすいモデルを検討した (Table 4)。検討を行ったモデルは, 4つである。まず等値制約を置かず, 男女間でパス図は一緒でも, 推定値はそれぞれ異なっていると仮定した「制約なし」のモデルである。次に Model 1として, 男女それぞれの群におけるパラメータ推定値に有意差が見

Table 3 性別にみた飲酒と心理社会的要因の相関

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1	飲酒頻度	—	0.27*	0.22*	0.56**	-0.21+	0.12	0.20+	-0.19+	0.01	0.30**	0.03	0.18	0.24*	0.33**	0.15	0.17
2	年齢	0.24**	—	0.82**	0.51**	0.04	0.08	0.02	-0.04	0.14	-0.09	-0.25*	-0.02	0.14	0.11	0.06	-0.13
3	学年	0.33**	0.84**	—	0.44**	-0.04	0.08	-0.01	-0.03	0.10	-0.11	-0.33**	-0.07	0.22*	0.10	0.06	-0.15
4	飲酒する友達の数	0.58**	0.48**	0.53**	—	-0.22*	0.01	-0.04	-0.06	-0.04	0.03	0.03	0.07	0.08	0.13	0.01	-0.02
5	飲酒の誘いを断る自己効力感	-0.38**	-0.01	-0.03	-0.24*	—	0.16	0.18	0.12	0.13	-0.05	-0.17	-0.13	-0.12	-0.09	0.03	-0.09
6	対人関係自己効力感	-0.08	0.00	-0.02	0.02	0.22**	—	0.43**	0.17	0.42**	0.04	0.03	0.07	0.09	0.33**	0.18	0.24*
7	困難に打ち勝つ自己効力感	-0.07	-0.11	-0.12	-0.08	0.16+	0.38**	—	0.08	0.34**	0.07	-0.04	-0.09	-0.02	0.29**	0.06	0.04
8	自己コントロール自己効力感	-0.15+	-0.04	-0.12	-0.09	-0.03	0.26**	0.16+	—	0.03	-0.33*	-0.23*	-0.16	-0.30**	-0.02	-0.03	-0.11
9	問題解決自己効力感	-0.12	-0.09	-0.02	-0.05	0.07	0.24**	0.16*	0.31**	—	-0.12	-0.07	-0.18	-0.02	0.19+	-0.07	-0.01
10	衝動性	0.09	-0.03	0.03	0.20*	-0.06	-0.05	-0.09	-0.16+	-0.02	—	0.44**	0.44**	0.49**	0.16	0.27*	0.43**
11	緊張不安	-0.06	-0.19*	-0.24**	0.03	-0.01	0.10	-0.27**	0.11	-0.03	0.15+	—	0.72**	0.41**	0.00	0.51**	0.68**
12	抑うつ-落ち込み	0.16*	0.06	0.12	0.18*	-0.15	-0.01	-0.30**	0.02	-0.15+	0.16+	0.60**	—	0.66**	0.12	0.57**	0.72**
13	怒り-敵意	0.12	0.10	0.23**	0.31**	-0.04	0.08	-0.01	-0.04	0.19*	0.41**	0.19*	0.37**	—	0.20	0.51**	0.60**
14	活気	0.01	-0.18*	-0.19*	-0.13	0.14	0.37**	0.51**	0.06	0.18*	0.12	-0.14+	-0.31**	-0.01	—	-0.15	0.23*
15	疲労	0.16+	0.17*	0.21*	0.25**	-0.07	0.06	-0.27**	-0.03	-0.04	0.22**	0.65**	0.62**	0.50**	-0.23**	—	0.63**
16	混乱	0.09	-0.03	0.04	0.15+	0.08	0.12	-0.17*	0.02	-0.06	0.16+	0.60**	0.53**	0.33**	-0.03	0.54**	

注) 各変数間の相関係数, 有意差 +p<0.1, \*p<0.05, \*\*p<0.01 (両側検定)。各変数は得点が高いほど, その傾向が強いことを意味する。上段: 男子, 下段: 女子。各変数における分析者数は, 欠損値のため対象者数 (全体236名, 男子84名, 女子152名) と同じでない。

られない男子の「困難に打ち勝つ自己効力感」から「活気」, 「衝動性」から「活気」, 「飲酒を断る自己効力感」から「飲酒」のそれぞれのパス係数を0に固定した。Model 2として、男女のグループ間で有意差が見られなかった10全ての共分散に等値制約を課した。さらにModel 3として、Model 1とModel 2で行った両方の制約を課した。その結果、Model 3が最もあてはまりがよいモデルであった (Figure 1)。このモデルによって、「飲酒」は男子では36.0% (Figure 1a), 女子では41.0% (Figure 1b) 説明できた。

Model 3における心理社会的要因の「飲酒」への直接的関連、気分要因を介した心理社会的要因の「飲酒」への間接的な関連について、バイアス修正済み信頼区間によるブートストラップ法を用いて検討を行った (Figure 1)。その結果、男子では、「活気」, 「飲酒する友達の数」から「飲酒」へ有意な正の直接効果, 「活気」を介して「対人関係自己効力感」から「飲酒」へ有意な正の間接効果が見られた (Figure 1a)。女子では、「活気」, 「飲酒する友達の数」から「飲酒」へ有意な正の直接効果, 「飲酒の誘いを断る自己効力感」から「飲酒」への有意な負の直接効果が見られた。また、「活気」を介して「衝動性」, 「対人関係自己効力感」, 「困難に打ち勝つ自己効力感」から「飲酒」への有意な正の間接効果が見られた (Figure 1b)。

### 考察

本研究では、未成年大学生を対象に、飲酒の実態を把握すること、飲酒に直接的にまたは気分状態を介して間接的に関連する心理社会的要因を検討するために性の影響を考慮して多母集団同時分析を行った。

その結果、年度末から年度初めにわたる1ヶ月間の飲酒経験者は、男子では5人に4人弱、女子では5人に2人程度と、男子の方が高率に見られたが、女子も軽視できない状況であった。この結果は、他

の国内 (31~67%)<sup>19) - 21)</sup>, 米国 (40~42%)<sup>22) 23)</sup> の調査に比べても高率であった。パーティ参加の頻度は飲酒に最も強い影響を与える要因の一つであることから<sup>24)</sup>, 本調査の時期と部活動やサークル活動の歓迎会の時期と重なったことが、経験者率の多さにつながった可能性がある。

また飲酒経験が男子に多いのは、国内外と問わず一貫して報告されている<sup>3)</sup>。このように飲酒頻度に性差が見られるのは、身体組成によるアルコール代謝率の相違によって一部は説明され得る<sup>25)</sup>。

飲酒行動に関連する心理社会的要因としては、男女とも飲酒する友達が多いほど、活気が高いほど、飲酒頻度が多かった。また、女子では、友達から飲酒に誘われたときに断る自己効力感が低いほど、飲酒頻度が多かった。さらに、困難に打ち勝つことや対人関係に関する自己効力感ならびに衝動性が高いほど活気が高く、それらが飲酒頻度の多さと関連していた。一方男子では、対人関係に関する自己効力感が高いほど活気が高く、それが飲酒頻度の多さと関連していた。

今回の結果において男女ともに見られた飲酒行動への友達の影響は、これまでの研究でも一貫して報告されている<sup>2) 26) 27)</sup>。青年期は親から心理的自立を試みる時期であるが、これは大学生の時期に一層強くなる。特に、新入生は、サポートや親密性の源になる仲間のネットワークを探し求めており<sup>28)</sup>, 社会的機会が大学生の発達の変遷の一助となる<sup>29)</sup>。アルコールを伴う社会的機会が、大学生活における社会的機能と仲間関係構築の場になっている可能性があり<sup>30)</sup>, 個人の行動や態度への仲間の影響力をさらに大きくしている。そして飲酒行動が、大学生としてのアイデンティティを促進したり、親からの自立の指標となっている可能性がある<sup>31)</sup>。

また飲酒行動は、飲酒を勧められる状況や飲酒を勧められた時によくある対応、誰が企画したかなど状況的な要因に関わる能動的な社会的影響や、他者の飲酒の仕方や勧められたときの振り舞いを観察し

Table 4 モデルの適合度

	$\chi^2$	df	p	GFI	AGFI	CFI	TLI	RMSEA	下限	上限	AIC
制約なし	21.998	10	0.015	0.974	0.854	0.950	0.790	0.073	0.031	0.115	113.998
Model 1	25.435	13	0.020	0.971	0.875	0.948	0.832	0.065	0.025	0.103	111.435
Model 2	25.095	20	0.198	0.970	0.915	0.979	0.955	0.034	0.000	0.070	97.095
Model 3	28.532	23	0.196	0.967	0.919	0.977	0.958	0.033	0.000	0.067	94.532

注) Model 1 : 各グループのパラメータ推定値の係数において、10%水準で有意差が見られない男子の「困難に打ち勝つ自己効力感」から「活気」, 「衝動性攻撃性」から「活気」, 「飲酒を断る自己効力感」から「飲酒」のそれぞれのパス係数を0に固定したモデル

Model 2 : グループ間で10%水準で有意差が見られなかった10すべての共分散に等値制約を課したモデル

Model 3 : Model 1 + Model 2

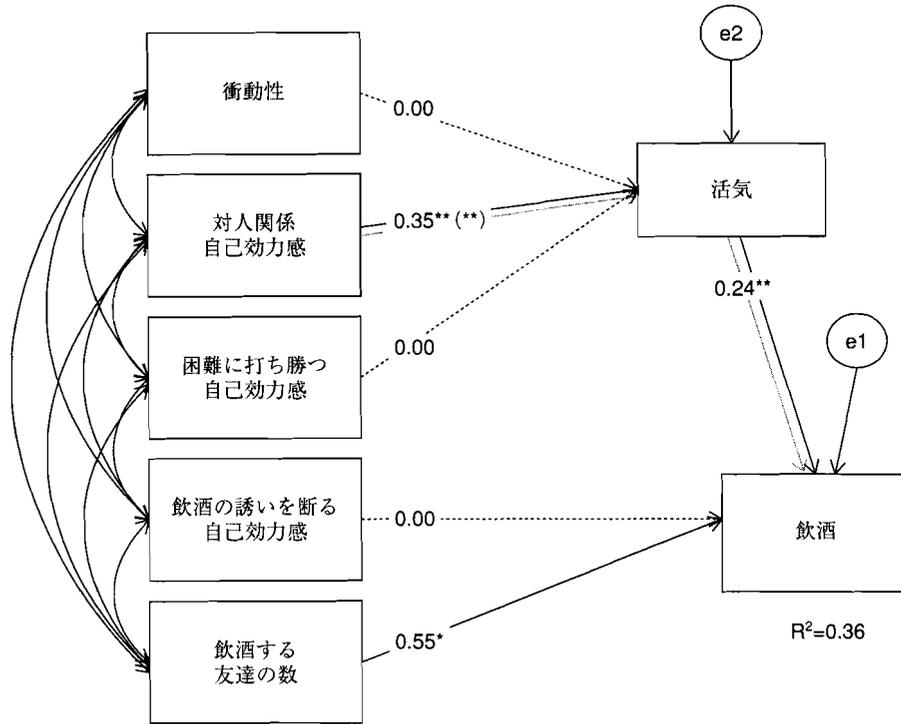


Figure 1a 未成年男子大学生の飲酒パスモデル

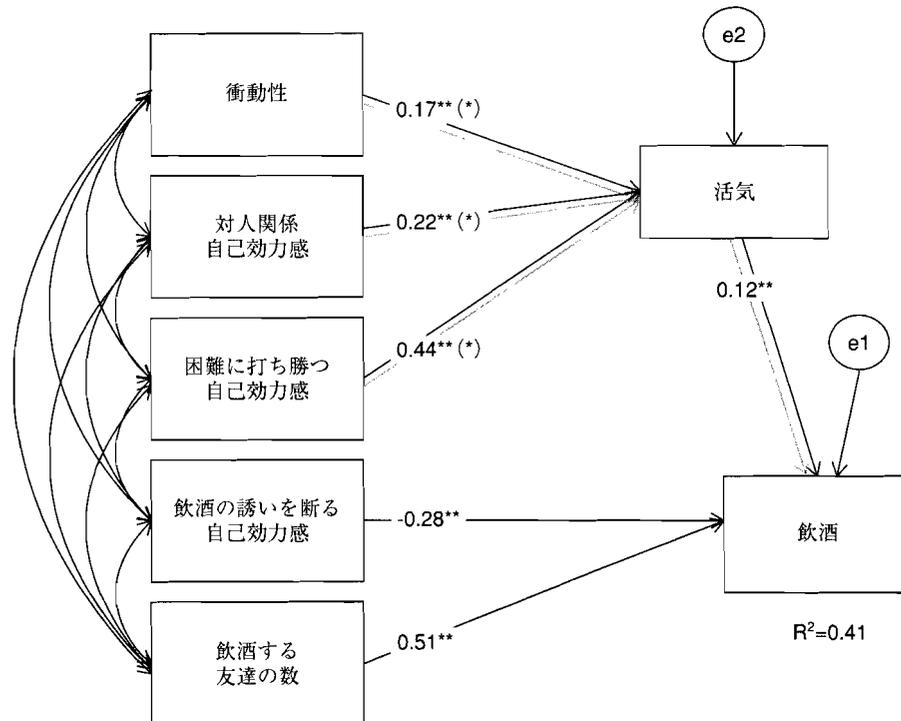


Figure 1b 未成年女子大学生の飲酒パスモデル

Figure 1 多母集団（性）パス解析による未成年大学生の飲酒と心理社会的要因のパスモデル

$\chi^2$  (d.f. = 23, N = 227) 28.53,  $p = 0.196$ ; CFI = 0.977, TLI = 0.958, and RMSEA = 0.033 (0.000-0.067).  
 点線単方向矢印は、パス係数を 0 に固定。実線単方向矢印は標準化されたパス係数を示す。e1, e2は、モデル内の各変数に関連した誤差変数を示す。実線双方向矢印は、0 に固定した 2 変数間の共分散を示す。  
 バイアス修正済み信頼区間を用いたブートストラップ法による有意差：\*  $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$  実線単方向矢印は直接効果を示す, (\*)  $p < 0.05$ , (\*\*) $p < 0.01$  灰色実線単方向矢印は間接効果を示す。

たりすることによる受動的な社会的影響によって、飲酒に対する社会的規範を構築していくとされる<sup>32)</sup>。このような状況も関連して、大学生活において飲酒をしないことは、一般的でない行動とみなされ、歓送迎会などにおいて飲酒しない学生は、繰り返しアルコールを勧められ、飲酒しないことについてしばしば友達にからかわれたり、劣等感をもつとの報告もある<sup>33)</sup>。一方、社交上手な者やある程度の仲間関係を築いている者は、飲酒の誘いを断る自信をもち、飲酒を断ることができるようになる<sup>34) 35)</sup>。従って、仲間との関係を築き大学生活に適応しようとする新入生の時期には、より飲酒の誘いを受け入れている可能性がある。本研究においても、飲酒の誘いを断る自己効力感と飲酒の頻度との関連が見られ、特に女子においてその傾向は顕著であった。これは女子の方が男子に比べて、仲間関係において、情緒的で親密な関係を形成することに関心をもち、そのような関係構築がサポートや自信の源になっている<sup>36)</sup>。従って、誘いを断ることは仲間関係を損ね、ひいてはサポートや自信の喪失につながる可能性があると考え、断る自信が持ちにくいと示唆される。

また、今回の研究では、活気と飲酒頻度の直接的な関連、活気を介した衝動性と飲酒頻度の関連が見られた。これまでも、衝動性と飲酒頻度の直接的な関連は、報告されている<sup>27)</sup>。また、活気や衝動性の高さは飲酒を誘発しやすいことが報告されており、この関連はひいては、暴飲など深刻な飲酒問題へと発展していく可能性が示唆されている<sup>4)</sup>。

以上先行研究を踏まえた本研究の結果から、未成年大学生の飲酒頻度は、社会的環境、心理的自立に関わる友達の影響、元気さや活力による飲酒の誘発が考えられた。従って、これらの要因を考慮した飲酒への対策が必要と考えられた。

#### 飲酒を予防するための方策

これまでの飲酒を予防するための対策のうち、特に、悪い誘いを断るスキル、認知・態度・信念といった個人の心理的要因と社会環境要因に着目したソーシャルスキルトレーニングを取り入れた心理教育的プログラムにより、飲酒の減少、意思決定、自己主張、不安、対人関係の改善が報告されている<sup>37) 38)</sup>。今回の研究の結果からも、飲酒の誘いを断るためのスキルトレーニングを提供することが必要と考える。

また、元気さ・活力が飲酒の頻度と関連していたことから、気分の高揚を飲酒ではない行動へつなげていく必要がある。さらに、未成年大学生には飲酒を勧めないような、大学環境に関する対策も必要と考える。

#### 今後の課題

本研究は、特定の地域における調査であるが、未成年大学生の飲酒問題は、全国で起こっている問題であることを考慮すると、さらに地域を拡大した実態や関連要因の把握が必要と考える。

未成年大学生の飲酒に関連する心理社会的要因は、今回取り上げた要因のみでは十分とは言えない<sup>3)</sup>。先行研究の成果を参考にするとともに、質的研究によって学生、保護者、学校関係者の生の声や現実状況を収集し、飲酒にまつわる問題や心理社会的要因のさらなる探求を試みる必要がある。

今回はサンプル数が小さく、凡その傾向を示すことは可能であったが、より詳細な実態を把握するには、より大きなサンプル数を用いた調査が必要と考える。

#### まとめ

未成年大学生を対象に飲酒行動の実態、心理社会的要因を検討した。その結果、男女とも飲酒経験者が高率に見られた。また飲酒頻度には、飲酒する友だちの影響、活気、飲酒の誘いを断る・困難に打ち勝つ・対人関係に関する自己効力感、衝動性が関連していた。従って、それらの要因を考慮した飲酒予防のための心理教育的アプローチが必要と考えられた。

#### 謝辞

本研究にご協力頂きました皆様に感謝いたします。本研究の一部は、科研費(21530728)の助成を受けました。

#### 引用文献

- 1) Jessor R, Jessor SL: Problem behavior and psychosocial development: A longitudinal study of youth. Academic Press, New York, NY, 1977.
- 2) Borsari B, Carey KB: Peer influences on college drinking: A review of the research. *Journal of Substance Abuse* 13, 391-424, 2001.
- 3) Borsari B, Murphy JG., Barnett NP: Predictors of alcohol use during the first year of college: Implications for prevention. *Addictive Behaviors* 32, 2062-2086, 2007.
- 4) Ray LA, McGeary J, Marshall E, et al: Risk factors for alcohol misuse: Examining heart rate reactivity to alcohol, alcohol sensitivity, and personality constructs. *Addictive Behaviors* 31, 1959-1973, 2006.
- 5) Simons-Morton B, Crump, AD, Haynie DL, et al:

- Psychosocial, school, and parent factors associated with recent smoking among early-adolescent boys and girls. *Preventive Medicine: An International Journal Devoted to Practice & Theory* 28, 138-148, 1999.
- 6) Bandura A, Barbaranelli C, Caprara G, et al: Multifaceted impact of self-efficacy beliefs on academic functioning. *Child Development* 67, 1206-1222, 1996.
- 7) Caprara GV, Scabini E, Barbaranelli C, et al: Impact of adolescents' perceived self-regulatory efficacy on familial communication and antisocial conduct. *European Psychologist* 3, 125-132, 1998.
- 8) Bandura A, Pastorelli C, Barbaranelli C, et al: Self-efficacy pathways to childhood depression. *Journal of Personality & Social Psychology* 76, 258-269, 1999.
- 9) 安藤美華代：中学生における問題行動の要因と心理教育的介入。風間書房，東京，2007。
- 10) Ando M, Asakura T, Simons-Morton B: Psychosocial influences on physical, verbal, and indirect bullying among Japanese early adolescents. *Journal of Early Adolescence* 25, 268-297, 2005.
- 11) Weinberger DA, Schwartz GE: Distress and restraint as super ordinate dimensions of self-reported adjustment: A typological perspective. *Journal of Personality* 58, 381-417, 1990.
- 12) 横山和仁（編）：POMS短縮版 手引きと事例解説。金子書房，東京，2005。
- 13) 田部井明美：SPSS 完全活用法 共分散構造分析（Amos）によるアンケート処理。東京図書，東京2001。
- 14) 豊田秀樹（編著）：共分散構造分析 [Amos編] 東京図書，東京，2007。
- 15) Baron RM, Kenny DA: The moderator-mediator distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology* 51, 1173-1182, 1986.
- 16) Bollen KA, Long JS (Eds.): *Testing Structural Equation Models*. SAGE Publications, Newbury Park, 1993.
- 17) Byrne BM: *Structural Equation Modeling with AMOS: Basic Concepts, Applications, and Programming*. Lawrence Erlbaum, Mahwah, 2001.
- 18) Hu LT, Bentler PM: Cut off criteria for fit indexes in covariance structure analysis: Conventional criteria versus new alternatives. *Structural Equation Modeling: A Multidisciplinary Journal* 6, 1-55, 1999.
- 19) 大石和男・安川通雄：男子大学生の喫煙・飲酒習慣とタイプA行動様式。日本生理人類学会誌7, 155-160, 2002。
- 20) 水野敏明・大塚三雄・橋本真弓：大学生の飲酒に関する研究（4）中日本自動車短期大学生について。中日本自動車短期大学論叢 33, 81-92, 2003。
- 21) 鈴木健二・武田綾・松下幸生：未成年者の問題飲酒促進因子についての研究—未成年者の飲酒問題コホート調査5年後の分析—。日本アルコール・薬物医学会雑誌 40, 559-571, 2005。
- 22) Wechsler H, Lee JE, Kuo M, et al: Trends in college binge drinking during a period of increased prevention efforts. *Journal of American College Health* 50, 203-217, 2002.
- 23) Johnston LD, O'Malley P M, Bachman JG, et al: *Monitoring the Future national survey results on drug use, 1975-2008. Volume I: Secondary school students (NIH Publication No. 09-7402)*. National Institute on Drug Abuse, Bethesda, MD, 2009. Available at [http://www.monitoringthefuture.org/pubs/monographs/vol1\\_2008.pdf](http://www.monitoringthefuture.org/pubs/monographs/vol1_2008.pdf) Accessed October 24, 2009
- 24) ヴァーマデーヴァン美幸：大学生のライフスタイル，飲酒または薬物使用，およびセルフエスティーム犯罪被害の有無。法と政治 58, 201-231, 2007。
- 25) Li TK, Beard JD, Orr WE, et al: Gender and ethnic differences in alcohol metabolism. *Alcoholism, Clinical and Experimental Research* 22, 771-772, 1998.
- 26) Capone C, Wood MD, Borsari B, et al: Fraternity and sorority involvement, social influences, and alcohol use among college students: A prospective examination. *Psychology of Addictive Behaviors* 21, 316-327, 2007.
- 27) Ham LS, Hope D A: College students and problematic drinking: A review of the literature. *Clinical Psychology Review* 23, 719-759, 2003.
- 28) Paul EL, Kelleher M: ,Precollege concerns about losing and making friends in college. *Journal of College Student Development* 36, 513-521, 1995.
- 29) Hays RB, Oxley D: Social network development and functioning during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology* 50, 305-313, 1986.
- 30) Thombs DL: An introduction to addictive behav-

- iors (2nd ed.). Guilford Press, New York. 1999.
- 31) Schulenberg J, Maggs JL, Hurrelman K (Eds.): Health risks and developmental transitions during adolescence. Cambridge University Press, New York. 1997.
- 32) Graham JW, Marks G, Hansen WB: Social influence processes affecting adolescent substance use. *Journal of Applied Psychology* 76, 291-298 1991.
- 33) Rabow J, Duncan-Schill M: Drinking among college students. *Journal of Alcohol and Drug Education* 40, 52-64, 1994.
- 34) Shore ER, Rivers PC, Berman JJ: Resistance by college students to peer pressure to drink. *Journal of Studies on Alcohol* 44, 352-361, 1983.
- 35) Klein H: College student's attitudes toward the use of alcoholic beverages. *Journal of Alcohol and Drug Education* 37, 35-52, 1992.
- 36) Coleman JC, Hendry LB: *The Nature of Adolescence: 3rd Edition. (Adolescence and Society)* UK: Routledge, 1999 (白井 利明 (訳) : 青年期の本質 青年期の本質. ミネルヴァ書房, 東京, 2003)
- 37) Schinke SP, Botvin GJ, Orlandi MA: *Substance abuse in children and adolescents: Evaluation and intervention.* Sage Publications, Thousand Oaks, CA. 1991.
- 38) Skara S, Sussman S: A review of 25 long-term adolescent tobacco and other drug use prevention program evaluations. *Preventive Medicine* 37, 451-474, 2003.